

---

## 木曾御嶽山噴火災害のDMAT活動拠点本部活動の検討

(岩下具美、日本集団災害医学会誌 21: 42-48, 2016)

2016年11月11日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

2014年9月27日11時52分に御嶽山が噴火した。被害状況は死者58名、行方不明者5名であった。この論文はそれに対して行ったDMAT活動についてまとめたものである。

### 活動内容

・登山口の救護所にDMATを派遣した。ガス種不明の状況で硫化水素を想定した解毒剤投与は不適切と判断し、初期治療は酸素投与と輸液のみとした。その後、救護所が危険区域となったことから全隊員を撤収させた。

→救護所におけるガス種解析と解毒剤使用についてさらなる研究が必要。また災害現場での危険性は、現場で活動している消防の安全担当者に危険予測と安全情報を確認する。最終的には隊員自身の安全は隊員自身で守る意識も求められる。

・撤収後は全被災者を木曾病院に集め重傷者は二次医療圏外へ搬出する計画を立て、傷病者は御嶽山から木曾病院へ自衛隊機で搬入し、木曾病院から災害拠点病院へはドクターヘリとDMAT車両で搬出した。病院敷地内へヘリポートと活動拠点本部内のヘリコプター搬送運航調整班は、ドクターヘリ搬送を円滑にした。

→被災者総数を予測できない発災初期は、重傷者総てを二次医療圏外へ搬出する方策は妥当と考えられる。しかし自衛隊との連携がうまくいかなかった案件があったため活動拠点内に自衛隊の連絡部を設置し、ヘリ調節班の設置場所や自衛隊との情報伝達手段に課題がある。

・避難所2ヶ所にDMATを定期的に巡回させ、帰宅困難者や捜索中の家族などの身体及び精神状況を確認した。避難所訪問時にDMATの説明を求められ、活動開始までに時間がかかった。

→小さな自治体でもDMATとの連携訓練を計画し啓発していく必要がある。

・黒タッグ傷病者の運用手順として、外表所見から災害外傷死が明確な場合は警察車両で死体安置所へ搬送し、県医師会より派遣された医師が検案を行った。

→死因の検索について画像および解剖の適応に関するマニュアル作成が必要。

・9月28日18時には傷病者の搬入数は減少し、重症度も軽減した。そのため救護班派遣依頼を行い、9月29日17時に撤収した。

→DMATから救護班への引継ぎは統括DMATがどのタイミングで誰にすべきか、熟知しておく必要がある。